

日本 IVR 学会 国際交流促進制度

第4回 GEST 参加印象記

塞栓療法の国際シンポジウムがサンフランシスコで開催

大阪大学大学院 放射線医学講座 大須賀慶悟

はじめに

5月5～8日、サンフランシスコで第4回 Global Embolization Symposium and Technology (GEST=ゲスト) が開催されました。連日の爽快な青空と海風に包まれたカリフォルニアの「空気」に誘われ、世界45ヶ国から約900名が集まりました。

GESTは、Dr Jafar Golzarian (ミネソタ大・米)、Dr Ziv Haskal (メリーランド大・米)、そしてDr Marc Sapoval (パリ大学・仏) の3人の欧米のIVRのリーダー達が発足した会で、全身多岐に及ぶ塞栓療法の実践的な教育や最新知見を盛り込んだ本格的な国際シンポジウムです。今年で4回目の比較的新しい会で、初回・第2回はバルセロナで、第3回はCIRSE共催でパリで開催され、今回はSIR共催で初の米国開催となりました。初回から日本IVR学会の推奨も頂けて、荒井保明先生(国立がん研究センター中央病院)と私が学術委員としてプログラムの企画に加わり、毎回多数の日本人演者にご発表頂いています。日本での知名度はまだまだ低い会ですが、日本人の活躍がこれほど目立つ国際会議も他に類を見ません。プログラムの詳細はホームページでご覧頂ければと思います。従来の、指定講演・マスタークラス(各種デバイスのライブデモ)・ハンズオンセミナーに加えて、新たに塞栓手技のライブ中継、一般演題口演・ポスター、バーチャル・シミュレーター展示などが行われ、より充実した内容でした。また、恒例のGEST Annual Lectureでは、荒井先生が「Use it for more patients - never embolize your eyes」と題してIVRの真髄と目指すべき道について印象深い講演を披露され、満員の会場から拍手喝采が送られるなど、日本にとっても記念すべき会になりました。

過去3回は、指定演者以外の日本人参加がほとんどありませんでしたが、

今回は、比較的参加しやすいロケーションと、45歳以下の先生方対象に日本IVR学会の奨学金助成が得られたことも手伝って、若手の先生方にも多く参加頂き、日本から総勢35名の参加がありました。以下、有志の先生からGEST初参加の感想を寄稿頂きましたので、紹介させていただきます。

慶応大学病院 放射線診断科
伊東伸剛

IVRに関心が高いつもりでも、なかなか思うようには携われず、他施設の若手とお話するたびに焦りばかり感じる放射線科医八年目です。一年ほど前、大須賀先生が講演された際にGESTの存在を知ったのですが、職場の先輩がIVR学会HPで支援の告知が出た際に教えて下さり、急に身近となりました。放射線科医の初期段階を一回りして、大学に所属して比較的身軽に動ける今年を「海外を知る年」と自分の中で位置づけしていたので、喜び勇んで応募しました。大きな会場、た

くさんの参加者で、球状塞栓物質や先端deviceについての難しい話を討論したり、施設ごとの成績を一般演題で発表したりするような会を思い描いていて現地に赴いたのですが、まずは会場のホテルが思いの外大きくない事に驚きました。次にプログラムをよくよく見ながら参加してみると、ほとんどが教育講演で構成されていて、実際も一般演題のセッションには参加者がまばら、大部分の人がメインホールの講演を聴いていて、フロアからの質問や議論も多くないことに驚きました。これらは自分にとって嬉しい意外性で、思いのほか基本的なことから、時には笑いも交えての講演には飽きることが無く、朝一から夕方遅くのセッションまで「椅子に根が生えて」しまいました。内容は多岐にわたりましたが、AVP4の話や、塞栓と標的薬の組み合わせ効果の話が特に印象的でした。今回アメリカ開催のためなのかもしれませんが、最先端の話や非常に高度な技術などの話は少なかったように思う反面、塞栓に関してほぼ全ての範囲をわかりやすく、面白く聞けて、時に目から鱗な欧米流も知ることができたので、私にとっては非常に楽しい機会でした。今回だけでもほとんどの話が網羅されている気がして、次回も同じくらい感激できるか少しだけ気になりますが、来年も是非、参加したいと思っています。ご支援頂いた方々にとっても感謝をしております、ありがとうございます。



Fig.1 代表世話人達による開会の挨拶

神戸大学医学部附属病院

山口雅人

この度、日本IVR学会からの支援金をいただき、GEST 2010に参加する機会をいただきました。本会では日本人指定演者の存在感が高く、またその講演内容の充実度も他の外国人演者を圧倒するものであり、その活躍ぶりは時々他の海外学会に参加した時に感じるフラストレーションも解消するような、溜飲を下げる思いでした。塞栓術の最新の知見とハンズオンセッションなどのプラクティカルなプログラムなど、勉強となることが盛り沢山で、大変充実した学会参加となりました。

私自身また神戸大学グループとしても、もし役目があれば今後どのような分野で貢献することができるのかと聴講しながら常に考えていました。そのことが、日頃の仕事に対するモチベーションを高めることになり、海外学会に参加することでの独特の高揚感も得ることもできました。しかし結局は与えられた場所でコツコツとIVRを行い、粛々と発信し続けていくことこそが大切だと再認識させられました。またいつの日か、GESTに限らずIVRのチーム日本の一員として、また神戸大学グループとしても国際的に貢献することができればとの思いを強くしました。

余談になりますが、最終日は午前中で終了したので、大阪大学の前田先生とオークランドアスレチックスのMLBの試合を観戦する機会を得ました。そこでなんと完全試合(長い歴史のMLBでも19回目)を観ることができたことは、今回の学会参加をより印象深くしてくれるものでした。

大阪大学大学院 放射線医学講座

坂根 誠

サンフランシスコの街は歩いているだけですべてが輝いて見え、まさに日本とは空気が違うといった感じがしました。GEST 2010会場では今や欧米で当たり前となったDrug-Eluting BeadsやEmbozene™ Microspheresといった粒子塞栓剤やAMPLATZER® Vascular Plugなど多岐にわたる新鮮な演題から多くの刺激を得られました。

海外経験に乏しく時差ボケのためか、また学会での活気ある討論に心が高揚したためか、滞在先のホテルでは会期中の深夜ほとんど眠ることができませんでした。仕方なく資料に目を通しながらテレビをつけ、アメリカらしい番組に辟易していると、NHKが海外向けに発信しているNHK worldを視聴することができ、日本を感じられる安心感からしばらくそのままにいました。番組の合間合間に“Your eyes on Asia”とキャッチフレーズが繰り返されましたが、本シンポジウムの盛り上がり反して、韓国・他のアジア地域の台頭や日本では多くの塞栓剤が保険収載されていない現状を考えると、睡眠不足の耳にそのフレーズがアイロニカルに響き、日本の将来・方向性につき真剣に考えなければいけないと思いました。

東京都保健医療公社

鈴木智大

私は放射線科歴4年目・IVR歴ほぼ3年目の(超のつく)若手放射線科医です。4月から着任した現施設においてIVRにも携わっています。前所属施設の上司であった岩手医科大学曾根美雪先生に紹介して頂いた事をきっかけにGESTには興味を持っていましたが、おそらく他の多くの若手放射線科と同様に演題発表のない海外学会の自費参加は足の遠いものかと思っておりましたが、今回の支援の情報を得て、このような機会にはなかなか出会えないと思いを参加を希望させていただきました。

日本から参加の先生はほぼ全員のお顔とお名前を把握できる規模ですが、かえって私のような若手でも国内の学会参加よりも他施設の先生に声をかけさせていただきやすく、多くの先生とお話をする機会を得ました。学会の内容も初学者にも興味を持ちやすくpresentationされている工夫が感じられました。学会主催のdinnerでは偶然隣に座られたアメリカ人の先生と片言の英語で会話にtry(パーティーでは頑張らざるを得なくて)。苦手ながらも何とか簡単な会話を楽しむ事もできました。

若手放射線科にとって参加費の援助は、学会に参加する意欲をバックアップしてくれるだけでなく、独力では得られ難い環境に身をおくことでの明日へのモチベーションアップの大きなチャンスであると考えます。最終日、サンフランシスコの街を散歩し有名なケーブルカーから海を眺めながら、自分を充実させる努力をすることに対し



Fig.2 日本人の集合写真

で責任感やモチベーションの高まりを感じました。英語の(まだ)苦手な若手放射線科医でも十分に刺激をうけ楽しむことができましたので、若手の先生方にも今後参加のチャンスがあることを願っています。

最後にこの場をお借りしてこのような貴重な機会を与えてくださいました、関係の諸先生方、曾根美雪先生、着任後まだ間もないうちに参加することをご承諾くださった現職場の先生方に感謝申し上げます。

武蔵野赤十字病院 放射線科 荒井保典

このたび、光栄にもIVR学会のGEST参加支援に選抜していただき、参加させていただきました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

自分は臨床研修終了後、国立がん研究センター中央病院放射線診断部でIVRを学び、4年間在籍したのち、2009年より現職でIVRを中心に仕事をしております。また、昨年度からIVR学会と形成外科学会で作成を進めていた血管奇形診療ガイドラインをお手伝いさせていただく機会もあり、血管奇形の治療に関しても見識を深めたいとの思いで参加しました。

GESTはまだ第4回と歴史は浅いながら、塞栓術の領域に関し非常にactivityの高い国際シンポジウムであると聞いておりましたし、日本の塞栓術の技術が国際的にどのような位置づけをされ評価されているのか、興味がありました。

サンフランシスコは日差しは強いものの海からの風が冷たく、朝夕は寒いくらいでしたが、会場は初日の朝一からすごい熱気でした(会場が狭めだったので、なおさらです)。全体的にシンポジウムを軸に組み立てられており、現在のまさにtopicsに対し様々な方向から命題を立て、それぞれの立場でシンポジストの先生方が公演されます。そしてそれに対し、シンポジスト同士のみならず会場からも活発な発言があり、とても勉強になりました。シンポジウムは立ち見も当たり前の盛況でした。また、一般演題や症例討論のセッションは、それぞれ膝を突き合わせてというような議論も繰り返され、参加者の真摯な姿勢と積極性が印象的でした。

なかなか、自分の英語力では発言するところまではいかなかったのですが、

日本の方が優れておりもっと発信していくべきだと思う分野もあり、もちろん逆に球状塞栓物質やDrug eluting beadsなど明らかに立ち遅れている分野もあり、考えさせられました。その考えたところ学んだところを、実臨床にどう生かすか、今考えています。

群馬大学大学院 放射線診断核医学 宮崎将也

5月初旬にサンフランシスコにて開催されたGEST 2010に、日本IVR学会およびGEST事務局からの支援を受けて初めて参加させて頂きました。会場には世界中から多くのIVR医が集まり、連日メイン会場は満席となっており、塞栓分野が世界でも注目を集めていることを身をもって体験することができました。初めてGESTに参加して最も印象に残ったことは、スピーカーとして多くの日本人の先生方が活躍されていたことでした。特にAnnual Lectureでは国立がん研究センター中央病院の荒井保明先生が、「新しい薬剤や医療材料によって世界中の医療費が高騰し続けている一方、一部の発展途上国はその恩恵を享受できていないこと」に警鐘を鳴らし、「IVR医のこれまで培った技術と創意工夫によって高価な薬剤や医療材料を使用しなくとも同様の治療効果をもたらすことができる。」といった内容の講演をされ、本会で最も大きな喝采を浴びられていました。とかく欧米の商業主義に流されやすい現代の医療業界において、アジア人代表として荒井先生がこのような発信をされた事は非常に意義深いものと感じられました。また、今回私を含め多くの日本人若手IVR医が支援を受けて参加していましたが、GESTでは塞栓分野に関する最新の情報を集中的に集める事ができる点や英語を母国語としない発表者が多く参加するため英語が比較的理解しやすい点などからも有意義で参加しやすい会という印象を受けました。まだ4回目と歴史の浅い会ではありますが、今後我々若手IVR医が目標とすべき会に発展していくのではないかとの印象を強く持ち、サンフランシスコを後にすることができました。

大阪大学大学院 放射線医学講座 前田 登

この度、日本IVR学会若手研究者支援を頂き、5月の連休後、GEST 2010

に参加してきました。今まではSIRやRSNAに参加してきたのですが、TACEが私の主な研究分野なので、上司の大須賀先生の勧めもあり、今年はこの会に演題を出して行くことに決めました。

GESTはその名の通り、塞栓療法一色の学会でしたが、細かく分けていけばこんなにも細分化ができるのか、と思うほど多くのカテゴリーに分類されていました。しかしながら、塞栓療法は日本のIVRでも中核を成している分野であり、全般的に理解しやすい内容でした。HCCのTACEのように日本が発展に多大な貢献をしてきた治療もあるためか、海外であるにも関わらず、日本人が注目され、日本人の存在感が非常に感じられる学会でした。満員の会場から拍手喝采が送られた荒井先生の講演は、それを端的に示していたと思います。今後もこの影響力を保てるように、海外の知見を取り入れ、多くの先生方に続いて頑張っていかなければならないと思いました。

学会自体の雰囲気については、朝7時台から多くの人がホテルの2 Floorを占める会場に集まるので、活気に満ち溢れていました。但し、指定講演・マスタークラスが非常に充実している分、一般演題口演・ポスターはおまけみたいな感じでやや閑散としていました。このあたりが他の海外学会との違いのように思います。

最後に、アメリカ入国審査時に「仕事で入国」のチェック項目を「いいえ」と記載していたら、「学会参加は仕事」とぶつぶつ数分説教され、税関通過時に非常食のカップ麺が「チキンはダメダメ」と没収され、幸先悪い気分でしたが、最終日学会終了後、神戸大学の山口先生に誘われたメジャーリーグ観戦で、史上19回目(19人目)の完全試合達成の瞬間を目撃できたのはラッキーでした。終わりよければ全てよしという気持ちで、気分よく帰国することができました。今後も機会があれば参加したいと思います。

愛知県がんセンター中央病院 放射線診断・IVR部 佐藤洋造

“あれ? けっこう寒いぞ!?” そう、サンフランシスコは実は夏でも気温があまり上がらず、平均気温(夏)は15℃らしい。夕方ともなるとかなり冷え込み、厚手の上着が必要なくらいだ。けど中には両腕・両足丸出しのオネー

チャンとかが普通に歩いていて、さすがいろいろな人種がいるなど感心してしまった…。

本題に入ろう。この度はIVR学会より資金援助をいただきGEST 2010へ参加させていただいた。今回は当施設よりポスター演題を二人のレジデントの先生に出してもらった。実は一般演題の募集は“もっと日本人が参加しやすいように”との配慮で今回から始まったようであり、自分のような英語苦手人間には非常にありがたいことである。さて内容をいくつか紹介したい。まず先日まで国内でも治験を行っていたAMPLATZER vascular plug (AVP)であるが、特にAVP 4は0.038のカテーテルでデリバリーが可能であり注目を浴びていた。あと塞栓の会なので当然ビーズを用いたTACEの報告が多数あり、またHCC領域ではTACE＋分子標的

治療剤併用の臨床試験の話もいくつかでていた。大腸癌などの肺転移に気管支動脈と肺動脈の両方から抗癌剤＋Lipiodolを注入するなんてのもあったが、そこまでするなら切除したら？(演者は一応切除不能と言っていたが…)とか本当に予後に寄与するのかな？とかいろいろ疑問に思ったが、何分英語力がpoorなので黙っていたのは言うまでもない。

最後になるが、今回は日本人の先生方の講演も数多くあり、我々の行っているIVRが欧米でも十分通用するものであると感じた日本人は自分だけではないだろう。“よーし、自分も日本に帰ったら英会話学校でも通うか！”と一瞬思うのだが、現地で和食の店に入るとつい“カルフォルニア巻きひとつください”とか日本語で話してしまうのだった…。

おわりに

GESTは、塞栓分野のstate of the artを実践的にテンポよく学べる開放的な会です。第4回も盛況に終わりましたが、日本人のプレゼンスの高さも実感しています。また、世界の先端事情に刺激されて、IVR医を目指す若い先生方の励みと将来の目標につながれば有意義だと思います。

末筆ながら、奨学金助成にご理解とご協力を頂いた日本IVR学会と、実際に参加されてGESTを盛り上げて頂いた日本人の先生方に心より感謝します。次回はCIRSE共催で2011年4月26～30日再びパリで開催予定です。より多くの日本人の先生方に参加して頂けるよう、今後もプログラムの充実に努めていきたいと思っています。

GESTホームページ：

<http://www.gestweb.org/v3/>